『民俗学のふるさと辻川』を執筆して

福崎町文化財審議委員　田　﨑　正　和

はじめに

令和五年三月、辻川区自治会から歴史読本『民俗学のふるさと辻川』が発刊された。

日本民俗学を樹立した柳田國男（昭和二十六年文化勲章受章）をはじめとする松岡五兄弟や松岡源之助を生み育てた辻川は、昔から商人・職人が商いしやすい（一方で村の土地が狭く分家がつくりにくい）町場であった。明暦元年（一六五五）に三木家が辻川村を選んで移住してきたのも、その後多くの先人が入れ替わり立ち代わりこの地に集ったのも、辻川に私たちを受け入れる「土壌」や「空気」があったからであろう。本書はそんな辻川の歴史を八十話の読み物にまとめた。本寄稿ではその中の四話（道・役場・学校・郵便局）を引用、再編集して紹介する。なお、各話中の❶・❷・❸・・は地図中の位置や表中の数字と同じである。

1　道（東西道）の変遷　地図1

❶平安時代からの道

峯相記（一三四八年）には有井村に一宿した慶芳上人が夢見に神積寺建立のお告げを受けたと書かれている。柳田は［「黒」を憶ふ］で「薬師堂は村では有井堂と謂って（中略）村が街道の両側に移る以前の、歴史を語って居る唯一つの遺跡であった」そして、この「御堂に詣って来る者は遠方の人ばかり多かった」と回想している。

平安時代の田原荘の記載［町史一・三巻］には山口社と有井寺が見える。当時の山口社は今の屋台蔵地にあったと推定されることから、この段丘面上の、山口社から有井堂を経て神積寺への東西道（**写真1**）は九九一年の神積寺創建の頃には存在し、当時の主要道であった可能性がある。また、この細い道が少なくとも明治前期（山口社は明治十年に鈴の森神社境内に移転）までは巡礼道だったようだ。

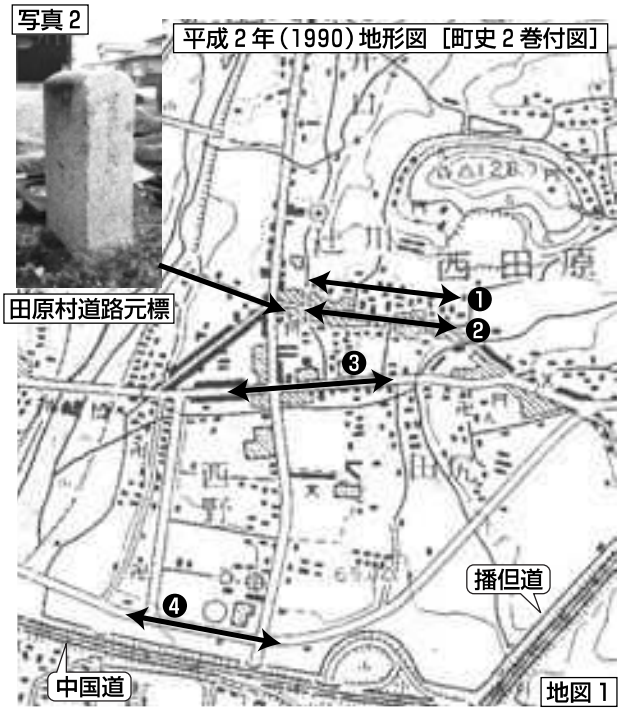


写真１
平成28年春の有井堂と新土塀
この道の東方に神積寺がある

❷近世（江戸時代）から近代（戦前まで）の街道

三木家は明暦元年に姫路藩主の新田開発の呼びかけに応じて、辻川村の現屋敷地へ移り住んだと伝わる。なぜ、三木家はこの地を選んで入植したのだろうか。それは当時すでに事業展開するための条件（交差する街道と大河、そして新たな移民を受け入れる土地柄）が辻川に揃っていたからではないだろうか。飾磨で酒屋を営んでいた商人としての才が辻川を選ばせたと考えられる。屋敷の裏には旧道❶があり、表にはすでに街道❷ができていたようだ。現「大西」松岡家には松岡一族が永禄年間（一五五八～一五七〇）に辻川に入ったという記録が残る（今でも正月には一六五〇年代の承応と明暦のお膳を使用）。三木家が辻川に入る約百年前から街道筋には松岡家を中心に家が増えつつあった。

三木家は2代目吉忠が内蔵（一六九七）、主屋（一七〇五）、酒蔵（一七一三）を建設し、3代目善政が一七三七年に辻川組大庄屋となり、その後幕末まで大庄屋を務めている。三木家には南の街道を年貢米、行商人、旅人、そして時には姫路藩の藩

主や家老の一行が行き交った記録が残る。また、年貢米はこの街道を通り、駒ヶ岩船着場から高瀬舟で飾磨港へ下り、その後千石船で大阪の蔵屋敷へ運ばれた。

人々の往来が多い街道沿いの町場は明治期になってさらに発展する。その起爆剤になったのが明治九年に完成した「銀の馬車道」と明治一九年に建った神東・神西郡役所〔同二九年から神崎郡役所（**写真3**）〕である。郡役所ができたことにより辻川の道や街は大きく様変わりする。何と言っても現辻川北交差点から西野への直線道路がついたことが大きい。馬車や荷車による物流と行政・管理機構の拠点であった辻川と、鉄道により発展する福崎駅前をつなぐ神崎橋が完成したのは明治三〇年（昭和六年までは木橋）であった。

写真3
明治末期～大正期の神崎郡役所

辻川北交差点脇には大正一一年設置の「田原村道路元標（**写真2**）」が今も立つ。旧田原村内の道路（現県道西田原姫路線）の起点を示すものである。

❸戦後の新道、そして❹へ

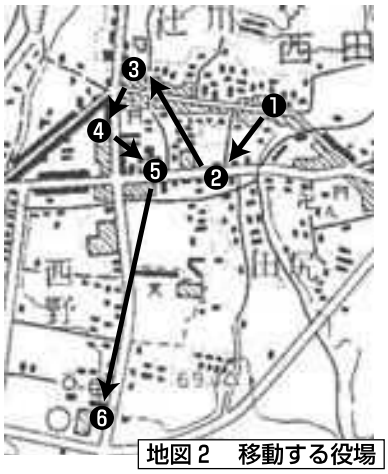
昭和二四年頃に開通した県道三木山崎線（現町道田尻辻川線）によって辻川の風景はさらに変化する。旧来の「東所」「中所」「西所」に「新開地」が加わったのである。この道沿いに同二六年に竣工した神崎地方事務所（**写真5**）は旧郡役所の機能を持っていた。その後、同三二年頃にこの建物に移転してきた町役場は、現庁舎へ移る昭和五〇年までの約二十年間この地で町行政を執り行った。

昭和四八年の播但連絡道砥堀～福崎間開通と、翌四九年の中国自動車道西宮北～福崎間の部分開通に始まる高速道路網の整備に伴い、道はさらに南へ変遷する。昭和五八年（一九八三）には福崎大橋が開通し、役場南の新道❹（現県道三木宍粟線）が東西交通の幹線道路になっていく。

辻川の東西道は平安時代から、時代の求めに応じて南へ南へ移動しながらその周辺に新たな街をつくってきた。

2　役場などの変遷　地図2・3・7

明治四年（一八七一）に公布された戸籍法では、新たな戸籍を編成するために、より大きな行政単位として複数の村からなる区画を設定し、その区画に戸籍を取り扱う役人として戸長・副戸長を置くことが定められた。この制度により神東郡は第九大区になり五つの小区に分けられ、辻川は第九大区第三小区になった。その後、明治一二年に郡が復活。神東郡・神西郡は小郡であったため二郡まとめて屋形村に郡役所が設けられた。そして郡には郡長、町村には戸長が置かれた。



地図2　移動する役場

❶当初（明治四～五年）の戸長役所は三木家に置かれたようだ（但し、明治二四年頃の田原村役場は、**地図3**では東三木家か、その西の現もちむぎのやかた地辺りに見える。三木家に次の❷まで役所が置かれたか否かは不明）。

一方、神東・神西郡役所は明治一九年一月に辻川に移転し、同年七月に新庁舎が建設された（**写真3**）。「僅か八十戸か百戸足らずの部落であった辻川でも、時代の影響をうけて、私らの目前で変って行くのがよく判った。いちばん大きな力となったのは郡役所である」「故郷七十年「辻川の変化」」。この郡役所はその後、明治二九年に神東郡・神西郡統合に伴い神崎郡役所になり、大正一五年（一九二六）の廃止まで、徴税・徴兵・教育・町村の監督など郡の中枢機関として多様な職務を行った。

❷明治三五年頃の**地図7**では、今の神戸マツダ付近に役場が見える。

❸明治末期頃から昭和一〇年（一九三五）頃まで、田原村役場は辻川北交差点の少し北にあった。大正九年の鈴の森神社改築上棟式ではこの役

明治24（1891）年神東・神西郡地図［町史4巻付図］

場を起点に北へ屋台などの練物が十五台（田原地区以外では山崎・新町・八幡からも）並んだ。この地に役場が建つ前には明治二三年頃から税分署があった（**地図3**）。当時の庁舎は木造平屋建で約五十坪の大きさで、木造二階建延八坪の倉庫も一棟あった［かたりべ2集］。

一方、郡役所は大正一五年に廃止になり町村は県の直轄となった。この庁舎には同時期に郡団体事務所が開設され、郡農会など一八団体が使用することになった［神崎郡誌］。

地図3では郡役所の西に登記所が見える。「故郷七十年」でもよく登場する上坂のかかり（現登記所跡地）に、姫路治安裁判所西田原出張所が郡役所内から移転してきたのが明治二二年（一八八九）。翌二三年には姫路区裁判所田原出張所と改称し、神戸地方裁判所の管轄になっている［神崎郡誌］。

登記所と裁判所の機能は一体のようだ。裁判所は明治四五年に大修繕している。

明治45年裁判所大修繕落成［町教委蔵］

「上坂の登記所」（神戸地方法務局福崎出張所）は昭和五二年（一九七七）三月まで約九十年間この地で事務を執り行い、その後役場新庁舎（現庁舎）北隣へ移転した。

昭和50年頃の登記所
クスノキ1本と門柱脇右のコンクリートのみ今も残る。

昭和12年，鈴の森神社境内からの眺め

❹田原村役場は昭和一〇年頃に現JA福崎東支店地に移転し（**写真4**）、ここで戦前戦後の混乱期を乗り越え、昭和三一年（一九五六）の福崎町合併を迎えることになる。新福崎町は五月に誕生した。町名を福崎、町役場を旧田原村役場に、そして初代町長には旧八千種村村長が就任した。

写真4

JA福崎東支店地にあった村役場

一方、旧郡役所の機能を持つ神崎地方事務所の新庁舎が昭和二六年に現「福崎歩道橋」西に竣工した（**写真5**）。この庁舎は同三〇年九月に閉鎖され、その後は福崎団体事務所として利用されていた。❺昭和三二年頃に町役場がこの元神崎地方事務所の建物に移転し、その後昭和五〇年に現庁舎❻へ移るまで二十年弱、「新開地」のこの地で町行政を担った。

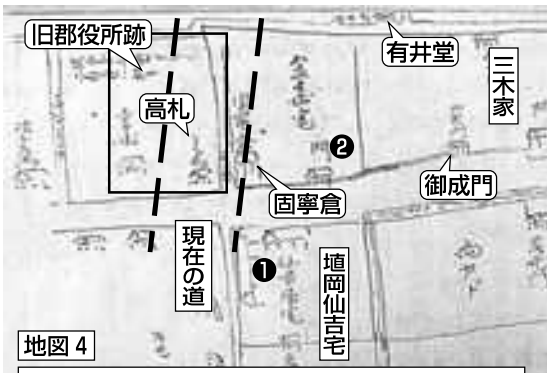
写真5

元神崎地方事務所（後方は福崎ボウル）

3 旧辻川郵便局の沿革 地図4・5

大正一二年に三木拙二によって新設された旧辻川郵便局舎（**写真6**）は平成二八年夏まで三木家西隣（**地図4・5の❷**）にあった（**写真7**）。この地は三木家の「にしら」と呼ばれ、大正六年頃に所有者が三木家に代わったようである。

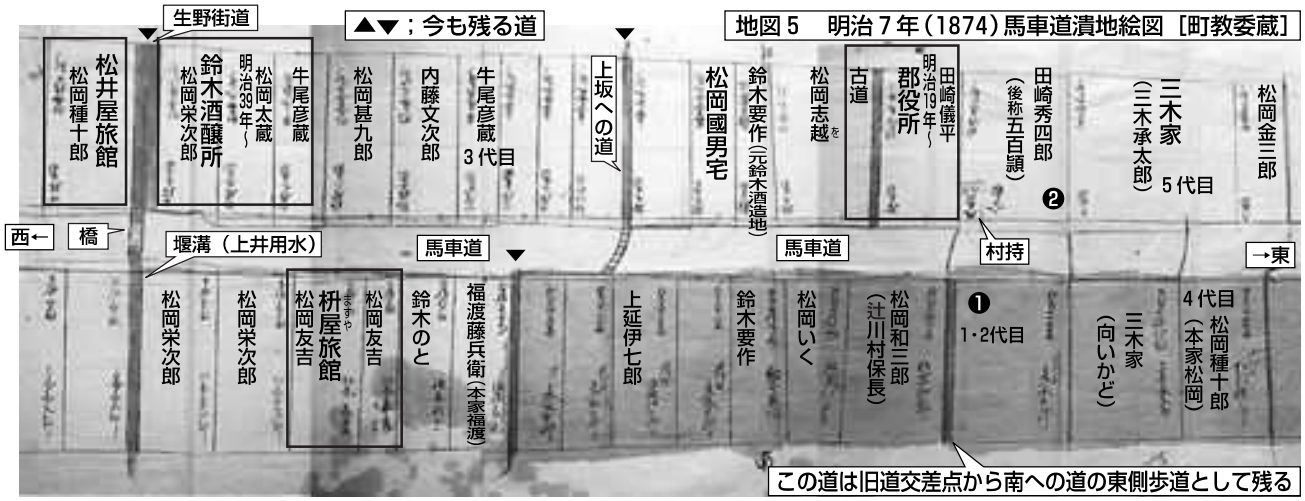
郵便局開設は明治一五年の西田原郵便局にさかのぼる。明治政府は地元の名士（かつての庄屋など）から土地と建物の一部を無償で提供してもらい、その代わりに彼らを「郵便取扱役」に任命して準官吏の身分を与え「公務」である郵便業務を請け負わせた。この郵便制度に手を挙げたのが三木家を手伝っていた同族の埴岡仙吉（**地図4の❶**）であった。



地図4

1840年頃の古図［広報ふくさき2013年3月号三木家よもやま話第83話，三木家「諸事控四番」町教委蔵］

明治二五年に電信局の付設が許可され、郵便為替や電報の取り扱いが始まった。國男少年が数え年九歳で北条まで兄からの送金を受け取りに行っていた明治一六年頃の西田原郵便局にはまだ為替の取り扱いはなかった。2代目局長の埴岡僊嗣は仙吉の子か。3代目局長の牛尾彦十郎（明治一六～二五年に県会議員）は、街道筋に土地を所有していた中島村の牛尾彦蔵の子と思われる。彦蔵も当時の名士で、明治三〇年の三木家での「新嘗祭供御献納」祭典に招待さ



地図5　明治7年（1874）馬車道潰地絵図［町教委蔵］

辻川郵便局の沿革［神崎郡誌，明治23年法令全書，表中※1は故郷七十年，※2は神東神西郡沿革考］

年	新たな取扱事務等	歴代局長	位置	在職年月（備考）
明治15	西田原郵便局創設	〈初代〉埴岡仙吉	❶	明治15年10月～同23年３月（明治16年頃、國男少年は兄からの送金（為替）を北条まで取りにやらされていた［兄嫁の思い出］※1）
明治18	郵便貯金			
明治23	辻川郵便局に改称	〈２代目〉埴岡僊嗣	❶	明治23年３月～同29年12月（郡役所で組合会開催、25年６月「辻川電信局許可二付設置費逓信省へ301円９銭９厘献納」報告 同年８月「建設費途金200円無利息貸与」審議※2）
明治25	郵便為替			
明治26	電報（和文）			
明治29	郵便局経営者交代	〈３代目〉牛尾彦十郎	❶	明治29年12月～大正９年10月
大正８	公衆電話通話			
大正９	郵便局経営者交代	〈４〉松岡愛次	❶	大正９年10月～同11年８月
大正11	郵便局経営家交代	〈５代目〉三木拙二		大正11年８月～昭和18 or 19年
大正12	電話交換		❷	新局舎竣工
終戦前	郵便局経営者交代	〈６代目〉三木冬二	❷	昭和18 or 19年［三木家文書］～同35年？
昭和31	福崎郵便局に改称			（５月新福崎町誕生）
昭和35	旧役場南へ移転	元の局舎に電報電話局の機能（電報と電話交換）のみ残る		
昭和42	田原小学校西に福崎電報電話局新設（電話自動化）→旧辻川郵便局役目終える			
平成20	❷の建物が国登録有形文化財（翌21年には県指定景観形成重要建造物にも）指定			

写真6

大正11年建設中の辻川郵便局と拙二（後方はお抱え大工の高橋芳松）

大正12年頃か
左後方に郡役所

写真7

れている。４代目局長の松岡愛次は「本家松岡」最後の当主鈴子氏の父（**地図5**の種十郎の孫）に当たる。５代目の拙二は三木家９代当主（同承太郎の子）。６代目局長の三木冬二は東三木家〔天保一四年（一八四三）から山崎組大庄屋〕４代当主卓一の弟で、辻川区内で戦後に分家した。冬二の子である素位（そい）氏は平成二八年、局舎を福崎町に寄付した。

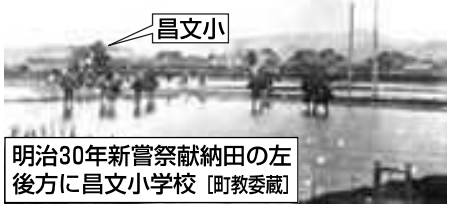
4　学校の変遷　地図3・6・7

❶明徳小学校が明治六年二月、西田原村二三七番地（現保健所付近）に設置されるも同年五月に東田原村に移転。その後、明治八年一月に元の辻川二三七番地に戻っている。どうやら、明治七年四月の辻川村挙（あ）げての寄附百三円九十五銭が奏功したようだ（その寄附者書上帳には三木承太郎、松岡種十郎、三木武八郎、福渡藤兵衛、鈴木要作、田崎秀四郎、福渡十次郎、松岡操（國男父）、松岡福五郎（源之助父）ら辻川関係者計八十一名の氏名（**地図5**参照）が見える［伊藤源五氏蔵］）。明治九年に、明徳小学校と同時期に設置された田原村内の五校が合併し昌文小学校と改称。その後、分割、辻川村内での移転を経て…

❷明治一六年七月、西田原村字西廣岡九九八番地に昌文小学校新校舎が建った（**写真8**）。

「故郷七十年」で柳田は「辻川の南を岩尾川（雲津川）という綺麗な細い川が流れている。（中略）

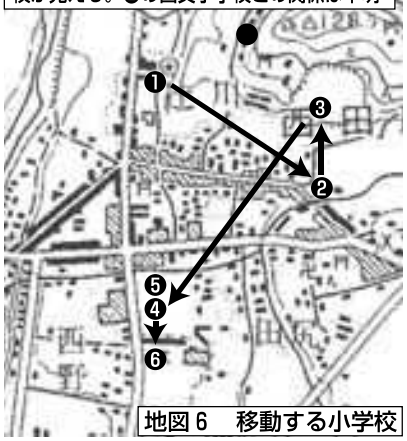
写真8



明治30年新嘗祭献納田の左後方に昌文小学校［町教委蔵］

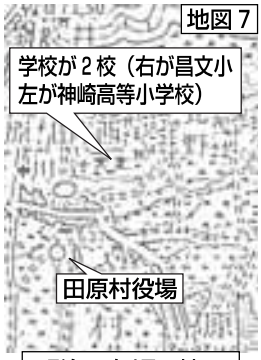
その少し上流に岩尾神社というお宮がある。妙徳山の鎮守さんだったらしい。それに向って左の所に私らが通った昌文小学校があった」［洒落の解る子供］と記している。この昌文小で國男少年は卒業前の一年を過ごした。國男は長兄鼎が明治一一年に十九歳で昌文小学校校長になったこともあり、翌一二年に数え五歳で入学し飛び級を重ね、同一七年一月に十歳で卒業した［二〇〇九松岡房夫氏］。

明治25年田原村之内西田原村北野組地図［町教委蔵］では辻川山西麓旧町営住宅地（●）に明徳校が見える。❷の昌文小学校との関係は不明



地図6　移動する小学校

地図7



明治35年頃の地図
［読本「福崎と柳田國男」］

❸昌文小学校はその後、明治三三年に現辻川山グランドの南西寄りに移転。同三五年には現養護老人ホーム福寿園付近に神崎高等小学校（田原・福崎・八千種三村の組合立）が建った（**地図7**）。その後明治三七年に田原尋常高等小学校と改称し、同四〇年に南田原尋常小学校と合併、そして…

❹明治四一年七月、現田原小学校地に田原尋常高等小学校新校舎が落成した（**写真9**）。その校舎北側に昭和一一年五月新講堂が建った。「雲津川は尻無川と言われ（昭和三年まで）現在の学校北側の川はなく田尻から南へ溝によって排水されておりました。降雨の為に氾濫し学校附近は水浸しになる事は再三でした。旧講堂は元土間であり水の中で式典が行われた事もありました。（中略）（そのため）腐朽甚だしく倒境（倒壊）寸前にありました時、辻川出身松岡源之助翁の篤志により鉄骨木造当時県内でも有数の近代建築の建立を見ました（**写真10**）。（田原）村を上げて感激した事は云うまでもありません」［かたりべ2集「田原村役場時代の行政機構」佐野一雄］

写真10

新講堂輝く昭和12年の田原尋常高等小学校

写真9

明治41年　初代校舎建つ（田原尋常高等小学校）

写真11

昭和17年　2代目校舎建つ（田原国民学校）

写真12

昭和54年　3代目校舎建つ（田原小学校）

❺昭和一七年五月、2代目校舎、田原国民学校が前尋常高等小学校の北運動場に建ち（**写真11**）、講堂と渡り廊下でつながった。この校舎が昭和二二年四月に田原小学校となり、昭和五四年八月に現3代目校舎（**❻・写真12**）が建つまで大切に使われた。油拭きされた廊下の匂いが懐かしい。現校舎南のフィールドアスレチック地には旧田原中学校校舎があった。新たな歴史を創る子供たちが育つ。

おわりに

本書は基本的に昭和期までの辻川や福崎町しか扱っていない。また、残されている文書や記憶がどうしても辻川に置かれた大庄屋三木家や多くの官公庁が主となるため、歴史の大半をつくってきた庶民の日常を掘り起こすまでには至っていない。これから本書を手に取りこの界隈を家族や友人と歩かれるなかで、新たな辻川史が発掘されることを願っている。さらに、辻川に関わる皆さんが本書を通じて地域の歴史や文化を知り、先人の営みを想い起こし、今生きる社会を考え、私たちの福崎町に誇りを持って生活してほしいと思っている。

［追記］本書は辻川全世帯と近隣の図書館、町内小中高校図書室、町内公共施設などに配布している。

参考・引用文献や写真の出典は、「福崎町史」、町立神崎郡歴史民俗資料館特別展図録「20世紀の福崎」・「明治の福崎」・「郡役所ものがたり」、田原小学校記念誌「柳の木とともに」・「まなびの郷」、福崎町教育委員会所蔵の三木家文書・写真などである。